



第 22 号

令和 7 年
6 月 20 日

発行所
俳人協会
支部長
小 島 照 子

宮崎県支部総会・春季俳句大会開催

桜は葉となり夏を思わせるような四月二十七日令和七年度俳人協会宮崎支部の総会及び春季俳句大会が開催された。会場は宮崎中央公民館、年度始めという事もあり、いろいろな会合と重複した会員もいて、いつもより若干少ない二十八名の参加であった。

十三時より総会。

支部長より「俳句はもともと俳諧から始まったもの、今日も明るい句会になればと思います。」の挨拶に続き、早川たから理事を議長に選出、令和六年度決算及び事業報告、令和七年度予算案及び事業計画がすべて満場一致で可決された。

十四時十分より句会。

清記、選句、披露、採点全てスムーズに行われ予定よりかなり早い終了となった。

なお、川口正博副支部長より「宮崎支部会員の加入を皆で働きかけよう」との強い発言があった。

最後に伊藤容子事務局長より、「秋の吟行句会」には俳人協会より野中亮介評議員に来て頂くことが決定したとの報告があり閉会となった。

(支部長・小島照子)

・互選高得点賞

巢立ちゆく鳥へ追ひ風向ひ風

入選

蝮の子たつた五寸のとごろ巻く

伊藤 容子

河野 通啓

足の蛭剥がし田植の昭和の子

花時計二時の花より蝶発ちぬ

蝶生る銀の折紙ひらくこと

・小島 照子選

特選

上り鮎跳ねては川を輝やかす

入選

背伸びすることにも疲れ豆の飯

同窓会へは「故郷」花は葉に

今時の歌は早口目刺焼く

・川口 正博選

特選

蝮の子たつた五寸のとごろ巻く

入選

上り鮎跳ねては川を輝やかす

ホームラン観てから寝るか菜種梅雨

たんぽぽは道端の花媚びぬ花

・森山 淳子選

特選

花過ぎの古墳三百風ばかり

入選

花時計二時の花より蝶発ちぬ

燕来るがらんとなりし子供部屋

不器用な父の三つ編み入園す

・早川たから選

特選

子供の日匍匐の尻の蒙古班

河野 通啓

毛利美智子

森下 啓子

草留 恵美

矢野 照子

草留 恵美

毛利美智子

河野 通啓

草留 恵美

小島 照子

森山 淳子

山口 好

毛利美智子

長友 純子

伊藤 容子

須藤 峯子

須藤 峯子

須藤 峯子

須藤 峯子

須藤 峯子

須藤 峯子

須藤 峯子

須藤 峯子

須藤 峯子

須藤 峯子

須藤 峯子

須藤 峯子

入選

足の蛭剥がし田植の昭和の子
我が町の小町も古希にあやめ咲く
蝮の子たつた五寸のとごろ巻く

【二人一句】

不器用な父の三つ編み入園す
ゴンドラの水切る櫂や春の宵
漁労終へ洗ふ甲板弥生尽
蝮の子たつた五寸のとごろ巻く
同窓会へは「故郷」花は葉に
千年の杜の流鏑馬青嵐
喪服着て桜吹雪のただ中に
緑さす古墳の主珠いだく
避難訓練終えてふるさと青田波
星空へ続く参道夏の汐
高千穂の頂上越ゆる春の泥
信号に列乱れたり遠足児
矯正のコンタクト強し立夏かな
花時や緋羅紗地布の十字紋
夏の夜や天の光はすべて核
ぶらんこの背ナ押す父の手の優し
蛤堀りや子等のあつたーをここに
昭和の日こころ揺さぶるハーモニカ
ソリストの眉間の力春闌くる
蝶生る銀の折紙ひらくこと
存分に日を零したる躑躅山
始むるより止むるは難し月朧
踏み踏みて幼足裏の花の屑
早蕨や塚と呼ばれて古墳群
のんちやんの公園デビュー青き踏み
青空と写すネモフィラ溶け合ひて
野遊びや草の名ひとつつばやきて
ミモザ咲く海辺の小さき美容室

河野 通啓
中島 茂男
河野 通啓

伊藤 容子
今田恵美子
川口 正博
河野 通啓
草留 恵美
小島 照子
須藤 峯子
高橋 和子
鳥居 達史
永岡 弥生
中島 茂男
長友 純子
中山 宣
中山 芳教
早川たから
松浦 徳子
三浦 優子
牟田 康世
毛利美智子
森下 啓子
森山 栄子
森山 淳子
矢野 照子
山口 好
山田 裕章
柚木崎幸子
渡辺美記枝
渡邊 洋子

私の一句

鳥居達史

稲架日和作小屋村の水うまし

昨秋、日本の原風景、紅葉を求めて西米良村小川を訪ねた。本音のところは、人気の郷土料理。目にも豪華でおいしく頂いた。いま世界からも我が国の食がブームになっている。

おいしい、ヘルシー、安心安全、日本食の特徴や食味へのこだわりが強みを発揮している。地域で採れた米、椎茸、鹿肉、山菜、栗などを使った料理に身も心も満足の日であった。

小川城址あたりを散策しているとカリコボウズの世界に迷い込んだような気分になる。

我等がひむかの地には水音の響く棚田や古い街並み、茅葺屋根などいたるところに里山の風景が見られる。この日も稲架に収穫した稲を掛けて乾燥させる風景が見られた。

日本の里山は心のふるさと、人と自然が共生する美しい風景である。四季折々の変化を生かした季節に合わせた農が営まれて来た。田植、稲刈の農繁期には住民総出で作業をして五穀豊穡を感謝し祭りや行事も多く、農村の生活や文化が育まれて来た。

一方で我が国の農業も多くの問題を抱えている。農業従事者の高齢化、後継者不足、耕作放棄地の増加などである。

山を拓き、用水路を通して造り上げられた棚田

は、昔の人々の知恵と苦勞の結晶である。棚田と里山が魅せるすばらしい景色を眺めているとこの美しい風景を次世代に残したいという思いが募ってくる。

私の一句

山田裕章

透析の母待つ廊下雨水かな

母が亡くなってもう十年になる。

父も母も香川県に生まれ戦後、結婚を機に親戚の居る日南市に住むようになったそうだ。

結婚前、母は教員をしていたが、これも結婚を機に退職し、父と米穀商を営むようになった。若い時の父は昔気質で少々短気な面もあったが、おとりした母が上手に宥めていた。

いっぞや癪癪を起こした父が割った茶碗を涼しい顔で拾い集めていたのを覚えている。

父が亡くなった後の母は、腎臓を悪くして透析をしていた。私は郷里を離れて生活していたが、退職まで一年程あったので、名古屋に住む妹に頼んで暫く帰省して面倒を見て貰っていた。私も仕事の合間に度々帰省した。

私が退職する頃に妹も身体を悪くして名古屋に戻る事になり、私は暫く日南に居る事にした。母の透析は何時間も掛かるので、送っていつて帰りに迎えに行くのだが、治療棟の廊下で母の顔を見

る事が多かった。そんな時の母は、苦しいながらも何となく和やかに穏やかに見えた。私の顔を見付けて安心したような顔にも見えた。

「雨水」の頃である。厳冬を過ぎ、いくらか春の気配もして来始めた。この頃私は妻と弟を亡くしていたのだが、母がまだ生きていてくれる事が嬉しかった。冬ではあるが、どこかに春の希望を感じつつ透析の終わるのを待った。母と過ごす時間は少ないだろうと思われたが、大事な時間ではあった。

いそやうの一句

河野通啓

蝮の子たつた五寸のとぐる巻く

首都圏で四十三年余のサラリーマン生活を終え、平成二十年ふるさとの木花に六十五歳で帰ってきました。ただ、いざ永住してみると木花の様変わりにはいささか驚きました。拙宅の東側の松林には運動公園が、西側の熊野原には宮崎大学が移転しており、あの台地が文教の府となり、そして、あの日向ラインが加江田溪谷との名称替えにはびつくり、誠に残念です。

俳句との出会いは、木花公民館での講座で講師は川口正博先生、しばらくするうちに先生から椎の実への入会と宮日への投句を進められ、句集『たぶの木』を頂きました。その中の「蝮打ち殺して

午後を何もせずの句に何だこれは？の存在感の大きさを覚え、私もいつか蝮の句を作ってみたの衝動に駆られました。

チャンスは三年前の加江田溪谷の遊歩道でした。遊歩道を溪谷の会の数人と散策していたら、蝮の子が我々に会った途端くるととぐろを巻いたのです。その時の句が掲句です。

この句を先日の俳人協会宮崎県支部春季大会に投句しましたら特選をいただきました。望外の評価に喜びを禁じえません。

木花の公民館講座はその後「木花俳句会」として存続しています。会員は十二名です。俳句は今、私にとって生活の一部になりました。

川口先生、そして「椎の実」の布施先生に感謝申し上げます。



エッセイ

お父さんとわたし

牟田康世

父が他界した。大往生と言われる年齢だったが、その存在はあまりにも大きかった。「穏やかで仏様のような人」以外、父を表す言葉を思い付かない。父との幼い頃の思い出はたくさんある。

令和7年度俳人協会宮崎支部 秋季大会

【日時】 令和7年10月5日（日）

【場所】 宮崎市 平和台公園

【投句料】 1,000 円

【スケジュール】

・10:00～ 各々吟行

・12:00～ 講演

講師 野中亮介

(のなか りょうすけ)

俳人協会評議員

「花鶏」主宰

・13:00～15:00 句会（3句投句）

【句会場】 青少年センター 2階

*場所は予定

*平和台公園から会場まで送迎します

*出欠の往復はがきを9月初旬に発送致します。

*多くの方の御参加をお待ちしております。

昔住んでいた家の五右衛門風呂で一緒に入る父が板を踏み沈める時、お湯がザバーっとあふれる音が楽しかった。父の好きなイワシの丸干しが出ると「ここがうめっちゃじ」と苦い腹わたを取り除き食べやすくしてくれた。同級生が持ってきた秋田犬の雑種の子犬が飼いたくて、猛反対する母に父が頼み込んでくれた。その夜二人で命名会議を開いた。「忠犬ハチ公」に倣ったが、ずうずうしすぎるよねと二を引き「ロク」と名付けた。

父が料理できるのは卵焼きだけ。ある日曜日、学校で球技大会があり、不在の母の代わりに父が弁当を作ってくれた。昼食時間に弁当箱を開けてびっくり。ご飯と卵焼きが詰まった、白と黄色の二色弁当だった。おかしかった。父の甘すぎる、でも大好きな卵焼き。お盆で仏壇にお供えたものをしょ

ろごもに包んで大淀川へ流しに行った。父の自転車の後ろに乗り、夜の風を切りながら大淀川まで突っ走った。楽しかったなあ。

父の耳元で「お父さん大好きだったよ。ありがとうね」と伝えると、息を引き取る寸前なのに父の目尻から涙が流れてきた。仏様のような人が仏様になった瞬間だった。

(宮崎日日新聞「茶の間」3月26日掲載)



名句鑑賞

『たぶの木』を読んで

永岡 弥生

老獵夫天地和合の謡かな
遁走の蜥蜴に重き尻尾あり

川口正博氏の句集『たぶの木』に掲載されている二句である。川口氏とは公民館講座「柘榴句会」に入会して以来ご指導を頂いている。句会では俳句にまつわるエピソードや川口氏の思ひ出話なども聞くこともあり笑いの絶えない楽しい会である。

最初の〈老獵夫〉の句は初獵の前に老獵夫が狩獵儀礼として祝詞のようなものを唱えている様子と考えられる。天の恵みの獸を仕留めて糧とする獵師の営みを天地和合と捉えられているのではないかと思う。獸と闘い抜く老獵夫と大自然への畏怖と敬愛が感じられる。

また後者の〈遁走の〉句は小さな生き物の必死に生き抜く様子をまるで自分が並走しているかのよう表現されている。

川口氏の詠まれる俳句は故郷の自然や人や酒にまつわる俳句が多い。その一つ一つの俳句に対象に対する敬愛や優しい眼差しを感じるのである。川口氏は傑出した観察眼で写生し心の眼を通して一句を完成されていると思う。

俳句は自然や人への挨拶であるとある俳人が言っていた。川口氏の俳句はまさに故郷の自然への挨拶、愛する者達への挨拶であると思う。川口氏にはお体を大切にしてくださいこれからも私たちを俳句の世界へ導いていただきたいと思います。

俳人協会宮崎県支部総会 & 俳句会



春季大会

令和7年4月27日(日) 参加者28名

◆俳人協会宮崎支部入会について◆

宮崎支部では会員を募っております。入会後は句会、吟行句会に参加することが出来ます。希望される方は、支部長推薦の枠にて俳人協会員になることも可能です。各句会のお仲間、俳句に興味のある方にどうぞお勧め下さい。

年会費 二千元
申込先 事務局

編集後記

昨年続き十月五日(日曜日)秋季大会に講師を迎えての講演が首尾よく決まった。今回の野中亮介先生は福岡在住で俳誌「花鶏」を主宰され、これまで数々の賞を受賞、句集「つむぎうた」では第六十回俳人協会賞をとられている。

山出づる真水のこゑや初硯

純白の湯気立てて人愛すなり

獅子舞の齒の根合はざる山の冷

しろたへの余呉しろがねの初諸子

涅槃絵図掲げ真鯉の浮かぶ山

ぜんまいの月の中まで伸びあがる

乾かしてまた雨を行く遍路笠

幾重にも水音ときとして郭公

遙かより帰るところの涼しくて

草笛のさらに上手のあたりけり

自選十句より

「季語は歳時記にあるのではなく、自然の中にこそ息づいているのだ、そしてその声を実感すること何倍にも人生が豊かに幸せに感じられるようになるのだ」と著書で言われている。

昭和三十三年生の六十七歳、まだまだこれからの人である。是非この機会に、皆さんが大会に参加され、またとない講演に耳を傾けて頂きたいと思う。

(事務局・伊藤 容子)

発行 俳人協会 宮崎県支部

発行者 支部長 小島 照子

発行所 事務局 伊藤 容子

〒八八〇-〇〇五三
宮崎市神宮一 九二一

電話 090-4489-4699
FAX 0985-251-0483

Yokoo1957@icloud.com

編集部

伊藤 容子 毛利 美智子